

# 『十卷章』にみられる『釈論』の訓点について

～三師の点をめぐって～

元山公寿

はじめに

智山伝法院で、新たに『十卷章』を出版するにあたり、その底本とした版本への書き込みをみてみると、『弁頭密二教論』（以下『二教論』）にのみ、『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）の引用への書き込みで、空海の解釈ではないと思われる読みを示した朱の書き込みが見られる。それらの書き込みのいくつかに「三師点」という記述が見られることから、これらは『釈論』の注釈家であった慈行大師志福の『釈摩訶衍論通玄鈔』（以下『通玄鈔』）、通法大師法悟の『釈摩訶衍論賛玄疏』（以下『賛玄疏』）、及び無際大師普観の『釈摩訶衍論記』（以下『記』）の解釈に基づくものと思われる。

これら三師は遼代に主に華嚴の立場から『釈論』の注釈を著しているので、その解釈は、自ずと空海のものとは異なっている。解釈が異なれば、読み方にも違いが見られるため、参考のために空海とは異なる読みを示した

のかもしれない。しかしながら、空海の著作を学ぶに当たって、何故、あえて空海の解釈とは明らかに異なる読みを、しかも空海の解釈と誤解してしまいかねない朱書で本文中に示す必要があったのであろうか。頭注などの形で、三師の解釈と共に異読があることを示せばすんだのではないだろうか。さらに、その空海の解釈とは異なる読みは、『二教論』にのみ示され、同じ引用がされている『秘藏宝鑰』では示されていない。これらのことは、江戸期の『十卷章』の学びと関係しているかもしれない。あるいは、江戸期に夏の論義で用いられた『釈論』に関する論義との関わりとも考えられるかもしれない。

そこで、『二教論』の中に引用されている『釈論』に見られる「三師点」に注目して、その頭注などを参照しながら、本文中に「三師点」が示された理由を考えてみよう。

### 一、使用テキストと三師点

まず、今回、使用した「三師点」の書き込みのある『二教論』のテキストは、いずれも智山書庫所蔵であり、『即身成仏義』（以下『即身義』）には万治三年（一六六〇）の刊語があり、『般若心経秘鍵』（以下『秘鍵』）には享保十七年（一七三二）再治と刊行の奥付のある版本に書き込みがされたもので、寛政九年（一七九七）に堅康が転写したとする奥書のある本（X本）と、弘化四年（一八四七）の講讀にはじまり、明治九年（一八七六）まで四度の講讀・講筵・講演を記した智積院第四十世弘現（一八一八〜一八七八）による奥書のある本（Y本）、及び奥書がなく、表紙に朱書で覚本と記されている本（Z本）<sup>4</sup>である。

この三本のうち、X本とY本は頭注も、書き込みもほぼ同じであるので、同一のテキストを転写したのか、あるいはY本がX本を転写したものと思われる。ただ、Y本に関しては、おそらく弘現が講演の時に書き込んだ

と思われるものも含めて、X本とは異なる読みも示されているところもあり、必ずしも読みが一致しているわけではない。一方、Z本に関しては、読みや、本文中に示した註記などは、X本とほぼ一致しているが、頭注がないので、X本に頭注が記される以前の本か、あるいは、その頭注のない本からの転写本を転写したものかもしれない。

『即身義』や『菩提心論』の奥書<sup>5</sup>から見れば、おそらく三本とも、頼瑜や運敵などによって加点されたものもとになっている。特に『菩提心論』の奥書からみれば、すべてではないにせよ、朱点は運敵によって加えられたものと思われる。ただ、頭注に関しては、運敵の奥書がある慶安元年（一六四六）から、寛政九年までの、およそ百五十年の間に加えられたものであろう。ただ、頭注のないZ本があることを考えれば、運敵より後に加えられた可能性が高い。『菩提心論』の奥書<sup>6</sup>によれば、智積院第二十一世の等空（？～一七七七）によって加えられたものかもしれないが、その弟子の泰音や、あるいは堅康自身によって加えられた可能性も否定できない。いずれにせよ、こうした頭注によって『十卷章』などのテキストを理解しようとした江戸期の修学の様子が垣間見られる。

これら三本で「三師点」と思われる記載がある『釈論』の引用箇所は、「五重問答」「得不問答」「撰不撰問答」「五種言説」と通称されるところで、『二教論』に引用される『釈論』のほぼ全てである。そのうち、「五重問答」「得不問答」「撰不撰問答」では、それぞれ二箇所、「五種言説」では、一箇所に「三師点」と思われる朱書がある。そこで、これらの記述を検討してみよう。

## 二、五重問答

まず、「五重問答」では、初重の問答である「無明煩惱厚薄別故」（五丁左五行目）の引用箇所、X本では「無明」の左に、Z本では「無明」と「煩惱」との間の左に朱書で「三師点」と記されている。しかし、Y本に、この書き込みはなく、しかも、三本とも、この「三師点」の記述以外に三師の読みと思われるような訓点は示されていない。

ただ、X本とY本には、「無明」と「煩惱」との間の右に朱書で☆が記されている。この☆は、頭注にある朱書の☆を示しているものと思われ、その頭注には、

或一義（慈行抄三の三十三丁「四句分別」）に云く、異人相望するに、無明にも厚薄ありと。故に、藏の疏に云く、謂く根本無明住地は、本来、自性差別にして、人に随て厚薄あり。厚き者は不信、薄き者は有信、前後、亦、爾なり。

とあり、無明に厚薄があるという一義を示して、その典拠として法藏の『起信論義記』（正藏四十四卷二七二上）を挙げているが、更に「或一義」の脇に『通玄鈔』を挙げ、「四句分別」と注記している。この「四句分別」とは、『通玄鈔』（『正統』X四十六卷一四八上）で『釈論』の「無明煩惱厚薄別故」の文を註釈した

此に由て四句分別を作す。一には身異惑異、起信論の如し。二には身異惑一、玄文論の如し。三には身一惑一、二論、云わず。若し非異に就かは、此の句あるべし。若し非一に就かは、則ち此の句なし。余の三、並に是れ非一にして説く。四には身一惑異、二論極成す。皆、本末麁細等を分つ故に。

とあるものを指すと思われるが、この記述が、『釈論』の引用の読みに影響があるとは思えない。したがって、

☆は単に頭注があることを示しているもので、「三師点」とは関係がなさそうである。

そうすると、ここでの「三師点」とは何を意味するのであろうか。考えられる理由は、この後で「三師点」と思われる訓点の示されているところが、「三師点」の記載のある丁の次の六丁左六行目で、丁が違った、ほぼ同じ場所であるので、単に「三師点」と記載する場所を間違えただけかもしれない。このことは、Y本に「三師点」の記載がない説明になるかもしれない。ただ、そうであったとしたら、Y本で訓点の示されているところに「三師点」と記載されていてもいいはずである。そうすると、この「三師点」という記載は、少なくとも五重問答の引用では、朱書の訓点が、三師の点であることを示しており、それに気づかずY本では転写しなかったと考えた方がいいかもしれない。

そこで、次に「三師点」と思われる点が見るところを見ると、それは、第三重の問答の「一法界心非百非背千是非中非中背天背天」(六丁左六行目)という文である。X本とZ本には、「非百非(百非に非ず)」の右に朱書で「百非を非(ひ)し」(傍線は朱書)という読みを示しているが、Y本にはない。続く「非中非中(中に非ず中に非ざれば)」の左には、三本とも朱書で「中(中)非中(中)に非ず」の読みを示している。さらに「背天背天(天を背き天を背きぬれば)」の左に、X本とZ本では朱書で「天(天)背天(天)を背き」という読みと、「天(天)に背き天(天)に背きぬれば」の読みとを示している。後者の読みは、Y本にも示され、X本とY本とには、「天(天)を(に)背けり天(天)を(に)背きぬれば」の読みを朱書で右側に示してもいる。

同じ引用のある『秘蔵宝鑰』(以下『宝鑰』)では、版本で「天を背けり天を背きぬれば」と読まれていて、X本だけが「天を」のところに墨書きで「天に」の読みを記している。したがって、この部分に関しては、『宝鑰』の読みがX本とY本に反映されたと考えるべきであろう。その他の読みに関しては、『宝鑰』には何の記載もな

いので、「百非を非（ひ）し」「中と非中とに非ず」「天と背天とを背き」の三箇所が「三師点」である可能性がある。

そこで、頭注を見てみると、まず、

一法界心等 贊玄疏に云く、若し清淨本覚を以て、亦、無明の辺域に属せり。後重所入の多一心の体は、百・非・而も能く非するに非ず。豈に千是も是すべけんや。中実と名くれども、中実に滞らず、義天を是すれども、義天にも着せず。弁談の足、断え、審慮の手、亡ぜり。是の如くの一心は明とやせん、無明か。答斯の如くの一心は生滅の依と為れば、無明の域に属す、明の分位にあらずと文り。初重は始覚の仏、第二重は本覚の仏、今、所入の一心なり。是れ、真妄の相對を絶する非有為非無為の一心本法なり。即ち後重の一心の下の生滅所入三自摩訶衍なり。

と『贊玄疏』（『卍統』X四十五卷八九九上）を引用しているので、「百非を非す」の読みは、傍点をつけた「百非も而も能く非するに非ず」によると思えるが、『記』でも、「此の一心は、百非も非する能わざる所」（『卍統』X四十六卷九〇上）とあるので、いずれの影響とも断定できない。いずれにせよ、これは三師の読みを反映させた読みと考えていいであろう。

次の「非中非中背天背天」に関しては、頭注で、

非百非は無に滞らざることを明す。背千是は有に留らざることを示す。百千は或いは只、満数に約す。非中は非有非無の中道にも滞らざる義を明す。横に約せば、背天は天は最上の義、豎に約せば、第一義天なり。已に横の中に非ず、亦、豎の天にも背く。或は（記の義）天は天然の義とも見え、或義の点に中と非中とに非ず、天と背天とを背くと（云云）。

として、「或義の点」として「中と非中とに非ず、天と背天とを背く」という読みを示している。これは、その前の「或は」の傍注として朱書で「記の義」としているのが、『記』（『正統』X四十六卷九〇上）を見てみると、此の一心は、百非も非する能わざる所、千是も是する能わざる所なり。中実と名くと雖も、其の性、実に中と非中とに非ず。第一義天と名くと雖も、本来、常に天と非天とを離る。

とあり、天を天然とする義は見当たらないもの、「中と非中とに非ず」「天と非天とを離る」とあり、こうした解釈は『賛玄疏』にも『通玄鈔』にも見られないので、この読みは『記』の読みを反映したものと見ていいだろう。

しかし、同じ頭注のあるY本では「天と背天とを背く」の読みは示されておらず、先の「非百非」の点もないので、Y本で転写し忘れたか、敢えてしなかったと考えるべきか、X本やZ本の転写した本には、この点があったが、Y本の転写した本にはなかったと考えるべきか、判断しかねる。ただ、少なくとも、これら『宝鑑』にも見られない読みは、空海の読みではなく、三師の読みと判断してかまわないだろう。しかし、どちらの読みを採用しても、それほど解釈に影響するとは思えない。そのためか、この「五重問答」の第三重の問答に関して、頼瑤の『釈論愚草』や、聖憲の『釈論第三重』などでも、管見の限りでは論義のテーマとして取り上げられていない。したがって、ここでの書き込みは、『釈論』を理解する上で、参考になる異読として記載されたものと考えられるべきかもしれない。ここには、空海の『釈論』解釈を理解するために、少なくとも三師などの『釈論』解釈を知る必要性があったといえるよう。

## 三、得不問答

次に「得不問答」での「三師点」と思われる読みが示されているところは、「是摩訶衍法諸仏所得耶能得於諸  
 仏諸仏得不故（是の摩訶衍の法は諸仏に得せらるや能く諸仏を得ず諸仏は得するや不なるが故に）」（八丁右二  
 三行目）と「如是八種法諸仏所得耶諸仏所得得於諸仏不故（是の如くの八種の法の諸仏は得せらるや諸仏は得せ  
 らる諸仏を得するや不なるが故に）」（八丁右六く左二行目）という二箇所である。

このうち前者については、まず、「諸仏所得耶」にX本とZ本とで「諸仏の所得なりや」という読みが朱書で  
 示されているが、Y本にはない。この文は、『十住心論』にもあつて、そこでも同じ読みがされている（『弘全』  
 一卷三九四、『定弘全』二卷三〇三）ので、「三師点」ではなく、『十住心論』の読みを記したと考えるべきであ  
 る。

続く「諸仏得不故」には、三本とも、「諸仏は得すること不なるが故に」という読みが朱書で示されて「三師点」  
 と記されている。この読みに関しては、『十住心論』（『弘全』一卷三九五、『定弘全』二卷三〇三〜四）で、

初に諸仏と言は、是れ真如門の諸仏を指す。次の諸仏は亦、真如門の仏なり。能得とは言く、不二門の諸  
 仏なり。其の徳、勝たるが故に、能く真如門の諸仏を撰得す。次に諸仏とは、生滅門の仏を指す。意の言く、  
 生滅門の諸仏は不二門の諸仏を撰得するやと。不故とは、是れ答の辞なり。言く、生滅門の諸仏は真如と不  
 二との仏を撰することを得ざるなりと。

と言っているので、「諸仏を得するや、不なるが故に」と読むのが空海の解釈である。

これに対して、頭注では、



得不問答（真生不二の三門相對して能所撰を論ずるなり）宗家の義は人人相望兩重の問答、三師の義は人法相望一重の問答なり。記に云く、廻文未盡なり。不得と云うべしと（云云）。諸仏は得すること不なるが故にと、是れ三師の人（諸仏）法（不二）相望一重問答と見る義の点なり。

として、『記』（『正統』X四六卷四四下）を引用しながら、「得すること不なるが故に」と読むのが、三師の解釈であることを明かしている。

次に後者については、X本とZ本で「是の如くの八種の法は諸仏の所得なりや、諸仏の所得なり、諸仏を得すること不なるが故に」という読みを朱書で示しているが、Y本にはなく、「三師点」という記載もない。この読みに関して、『干住心論』（『弘全』一卷三九五、『定弘全』二卷三〇四）で、

初に諸仏と言うは、種因海の本法の八仏を指す。次に諸仏と言うは、末法の八仏、是なり。言く、本の八仏は末の八仏を撰することを得。次に諸仏とは、不二性徳の仏を指す。言く、本末の八仏は円円海の仏を撰することを得ず。

というので、空海の解釈では「八種の法の諸仏（種因海の本法の八仏）が（末法の八仏に）得せられるか。諸仏（末法の八仏）は（本法の八仏に）得せられる。（本と末の八仏は）諸仏（不二の仏）を得するの否か。不である故に」と解釈されているので、明らかに、この読みとは異なる。

この部分に関しては、三本とも「八種法諸仏」の脇に傍注として墨書で「三師は人法相望一重問答、宗家は人人相望二重問答」として、前の頭注と同じ注記をしており、X本では朱書で「末師」と記されているので、おそらく『釈論』の注釈家を指すものと思われる。そこで『賛玄疏』（『正統』X四十五卷八五五中）を見てみると、問う、八種本法は仏の成就なりや。答、諸如来は能く成就するを以ての故に、八の本法は能く仏を得するに

非ざるが故に、是れ修行種因海なるを以ての故に

とあり、さらに『通玄鈔』（『正統』X四十六卷一二二上）では、

諸仏所得等とは、此れ因分に就いて説くなり。亦、二義を具す。一に云く、唯、自ら二句相望して説く。意の言く、是の仏、因を修して成就する所なり。次に菩薩等の三は、若し因行を修さば、亦、能く成就するが故に亦復如是と云う。其の八本法は因を修すべきにあらざるが故に、却て彼人を成就すること能わざるが故に於諸仏得不故と云う。

といつて、八種の本法を仏が得し、本法が仏を得するのではないとするので、この読みも「三師点」と考えてい

いだらう。

この「得不問答」での「三師点」は、先の「五重問答」とは違い、明らかに空海の解釈とは異なる三師の読みを提示している。そして、前述したようにX本とY本とでは頭注に「得不問答」として、三師の解釈（人法相望）と空海の解釈（人人相望）とを挙げて、その違いを示し、さらに、その後で、空海の解釈に四難を挙げて、その難を会通している。この「得不問答」は、そのまま『釈論第三重』での論題となっており、そこでは、空海の解釈に八難を挙げて、問答をしている。これらの難が必ずしも一致するわけではないが、空海の『釈論』解釈の独自性を知る上で重要であるからこそ、朱書で三師の読みを記しているものと思われる。ここには、先の「五重問答」での「三師点」も含めて、当時、『釈論』を解釈する上で、空海の、ひいては真言密教の解釈と、三師の、あるいは顕教の解釈を対比して理解することで空海の独自の理解しようとしていたものと思われ、智山の修学を中心であった夏の報恩講の『釈論』の論義との関わりが想定される。

#### 四、撰不撰問答

次に「撰不撰問答」で「三師点」が示されているのは、「其円円海徳諸仏勝（其の円円海徳の諸仏は勝たり）」（九丁右二行目）と「而撰不撰故（而も撰と不撰との故に）」（九丁右六行目、九丁左一行目）という二箇所である。

このうち前者については、三本とも朱書で「其の円円海は諸仏を徳して勝たり」という読みを示し、「三師点」と記している。ここで、「徳して」と読むことには違和感があるが、これに関して、X本とY本とは、頭注で、

円円海徳 三師の本は海得に作る。円円海は諸仏を得して勝れたりと訓ずべし。是れ人法相望なり。大師の所覽、今の所引の如く人人相望なり。人師の義の文点は円円海徳は諸仏に勝れたり。

といい、Z本でも「徳 三師所覽の本には得に作る」という頭注があり、三師の参照した『釈論』では「海得」となっているので、「其の円円海は諸仏を得して勝れたり」と読むことを示している。実際、『賛玄疏』（『正統』X四十五卷八五五上）や『通玄鈔』（『正統』X四十六卷二二二下）でも「其円円海得諸仏勝」とあり、「得」となっている『釈論』を参照していたものと思われる。また、正蔵の『釈論』でも「得」の字を使っているが、高野版本で「徳」となっていることを注記しているので（正蔵三十二卷六六八上）、真言宗内では空海が参照した『釈論』を用いることが伝統となっていたことが推測されるところに、真言宗以外では「得」の字を使用した『釈論』が用いられていた可能性が指摘できる。これによって、この「三師点」でも、空海（密教）と三師（頭教）とを対比して解釈しようとしていたことが推測される。

次に後者については、X本とZ本とに「而も不撰を撰するが故に」という読みを朱書で示し、三本共に朱書で「円海不撰の因分を撰す慈行意」と注記して、慈行の読みであることを示している。また、X本とY本の頭注では、

盧舎那仏雖撰等 答の意の云く、彼の盧舎那は因分の三世間を撰し、果分の出世間を撰さず。大本経は果分を撰さざるに約し、分流は因分を撰するに約して、其の身心とすと云う故に相違の過なし。慈行、撰不撰の文を釈して云く、円海不撰の因分を撰すと（云云）。是れ分界別の義なり。不撰を撰すと之を点ず。言は果海は因分の法を撰さず、因海は果海の法を撰さず。分界別の故に。盧舎那仏は果海不撰の因分の三世間を撰するなり。

といつて、慈行の同文を引いている。これは、『通玄鈔』（『卍統』X四十六卷一六三下）に、

而撰不撰故とは、意の言く、遮那は是れ因、円海は是れ果、其の三世間に同じく十地因果二分あり。其れ果分なれば、則ち円海の中に撰し、其れ因分なれば則ち遮那の中に撰す。今の遮那仏、而も但し彼の円海家不撰の因分を撰するが故に、大部と支流との二、違いなし。

とあるものを指しており、円海には因分の法を撰さず、因分には円海の法を撰さないから、因分である盧舎那は、円海が撰していない因分の三世間を撰していることを表すため、「不撰を撰す」と読むことを示している。

これに対して、空海は、『十住心論』（『弘全』一卷三九四、『定弘全』二卷三〇二）で、

撰不撰と言うは、即ち上の所説の性海と因海との撰不撰、是なり。又、真如生滅の二門、是の如し。

といい、さらに『釈論』（正藏三十二卷六〇五上）の真如門には真如門の法を撰するが、生滅門の法を撰する。ところがなく、生滅門には生滅門の法を撰するが、真如門の法を撰することがないという文を引用して、因分には因分の法を撰しても、果分の法を撰することはなく、その逆も同じであるとして、盧舎那の「撰」は因分、「不撰」は果分であると解釈しており、「而も撰と不撰との故に」と読むことを示している。

この両者の読みには違いがあるが、結局、因分には果分の法を撰することはなく、果分には因分の法を撰する

ことはないという解釈に違いはない。この「而撰不撰」も『釈論第三重』の論題となっているが、ここでは、この慈行の解釈は答者の根拠として用いられている。細かい分析は、別の機会に譲るが、空海と三師の解釈においては、このように、必ずしも「得不問答」のように相對する解釈があるだけではないことが理解されよう。そのため、空海の著作を理解する上でも、まさに「権実の中間に居して、顕密の両際を兼ね」（『釈論指事』、『興全』上七一）と覺鑿に言わしめ、顕教的な解釈と密教的な解釈とのどちらにも通ずる『釈論』に対する空海とは異なつた三師などの解釈を知ること、空海の思想的な特徴がより理解されるものと思われ、これが三師点を付した一因であつたかもしれない。

## 五、五種言説

次に「五種言説」で「三師点」が示されているのは、「如義語者実空不空空実不実（如義語とは実空にして不空なり空実にして不実なり）」（二十三丁左四行目）の文で、三本ともに、おそらくは版で、左に「実に空なり不空なり、空は実なり不実なり」という読みが示されており、そこに朱書で「通法点」と記されている。この訓点を書き込みであるとしたら、朱書にしなければならぬ理由がわからないので、おそらく版にあつたものと考えた方が合理的であると思われる。そうすると、通法などの三師の読みが、再治の時点でも版にも反映されていたことになり、空海の読みと通法の読みとを併記する必要性があつたと推測される。そこで、頭注を見てみると、

実空等 元暁（金剛三昧論）の意は、上の句は真如無相の理を指して、実相性空と言わんと為れば方法歴然たり。故に不空という。下の句は真空は実なれば、実の相を存せず。故に不実と云う。

といっている。これは、元暁の『金剛三昧論』（正蔵三十四卷九二一中～下）で、

初の釈の中に実空不空と言うは、謂く真如実相も亦、空なり。前に説くが如く、空相も亦、空なりと言う。故に実空と言う。而も其れ実相の理を亡ぜざるが故に不空と言う。実あるにあらずと雖も、而も実なきにあらざるが故に。空実不実とは、謂く真空の理、是れ実なりと説くが故に空実と言う。而も其れ真空の理を存せざるが故に不実と言う。空なきにあらずと雖も、而も空あるにあらざるが故に。

と説いているものの趣意であると思われ、その脇に朱書で「印点、此の義に同じ」としているのが、この元暁の意が、版本で右に示した「実空にして不空なり、空実にして不実なり」という空海の読みと同義であると解釈しているであろう。

頭注では、この趣意に続けて、次の『賛玄疏』（『卍統』X四十五卷八六一下）の文を引用している。

実空不空とは、此れ異門を簡う。妄法の有にあらざるは、實に是れ、其れ空なり。真徳の無ならざるは、實に是れ不空なり。亦は可なるべし、理性の実空は諸相を絶するが故に、情実の不空は衆境を起すが故に。空実不実とは、亦、異門を簡う。妄法を空と名くるは、空即是実なり。真法を空と名くるは、空即不実なり。亦、可なるべし、法性の空実は所顕の体なるが故に、但空の不実は能顕の門なるが故に。

これが、通法の解釈で、さらに頭注では、これを図表化してまとめている。その同じ図表には「實は空なり、不空なり」の読みを出し、その下に、「空は実なり、不実なり」と「実と不実とを空す」という読みを示して、「卍統抄」の記は大旨、通法に同じ」と記し、それぞれに細かく傍注を入れて説明している。これは、『通玄鈔』（『卍統』X四十六卷二二六上）に、

実空不空と言うは、相真如に属す。故に頌に遠離四句相（へち実空なり）、円満四法徳（実不空なり）と云う。空実不実とは、体真如に属す。此の句、備に遮表の二義を包む。且く表とは、謂く空は是れ実なれば、即ち

三実徳は断辺を離る。故に頌に円満三実徳と云う。空は是れ不実なれば、即ち言を転じて遣りて、常の辺を離る。遮とは、謂く空は実なければ、即ち第二に言を転じて遣りて、常の過を離る。故に論に曰く、真如と云うは、亦、相あることなしと。双べて上の二を証さば、空は実ならざることなし、即ち三仮を離れ、断の過を離る。故に頌に遠離三仮相と云う。

と言っているものをまとめたもので、通法とは異なつた解釈をしていることがわかる。一方、『記』（『正統』X四十六卷四九下）では、

実空不空とは、実に二義あり。一に空、二に不空なり。謂く妄法の本無、之を名けて空とす。真法の本有、名けて不空と曰う。二、皆、実と名くるが故に。空実不実とは、空に二義あり。一に実、二に不実なり。謂く真法を實と名け、幻妄を不実とす。二、皆、空と名くるが故に。と言っており、確かに通法の解釈に近い。

このように、ここでは空海の解釈と、三師それぞれの解釈とを対比して、『釈論』の文を理解しようとしている。この三師の解釈を対比して理解しようとする態度は、『釈論第三重』に多く見られ、ここでの解釈も、それに通じるものと思われる。ただ、『釈論第三重』には、この主題が、直接、論義に用いられてはいないようであるが、『釈論愚草』には「如義語者実空不空（文）今此実空者可妄法乎<sup>8</sup>」という論義があり、やはり三師の解釈を取り上げている。こうしたことから、空海の解釈を知るため、『釈論』に関しては、三師の解釈を対比して理解しようとしていたことがわかる。

## まとめ

以上、『二教論』に引用されている『釈論』に見られる「三師点」と思われる朱の書き込みを考察してみたところ、その一部には空海の他の著作での読みを反映させたものもあったが、その多くは『釈論』の三師の解釈に基づく読みを反映させているものであった。ここには「顕密の両方を兼ね」た『釈論』を理解するためには、空海の解釈だけではなく、顕教的な三師の解釈も、あわせて理解すること、空海の解釈の特徴をつかもうとしたことが関係していると考えられる。しかし、それでも頭注ではなく、訓点という形で本文中に表記する必要がある理由は判然とはしないが、Z本のように頭注を付さない形であつたら、やはり訓点で三師の読みを表記するしか方法がなかったのかもしれない。

いずれにせよ、空海の著作の中でさえも、こうして三師の読みと対比しながら『釈論』を理解しようとしたことは、真言宗で『釈論』を理解する重要性があつたことを物語っており、夏の報恩講で『釈論第三重』の論義が行われていたことと結びついている。実際、X本の『二教論』は寛政九年の三月二十日、「夏講之暇」に書写されている。この「夏講」が夏の報恩講を指すとすれば、やはり『釈論』の論義との関わりが推定される。『智積院史』(三三七頁)によれば、根来時代の夏の報恩講は、二月二十四日から四月十二日まで行われていたというので、智積院でも日程はそれほど違つてはいないだろう。智積院での夏の報恩講は、次第に行われなくなったと言われているが、この記述を見ると、寛政年間にはまだ行われていたといえるだろう。しかも、『二教論』以外の転写時期は、四月末から初秋までで、夏の報恩講にも、冬の報恩講にも、时期的に重なっておらず、おそらくこの時期に、『十卷章』の修学が行われていたのであろう。その中で、あえて、夏の報恩講に重なる三月に『二



『十卷章』にみられる『釈論』の訓点について～三師の点をめぐって～

教論』を転写したことは、やはり『釈論』の論義との関係があつたと思える。

一方、Y本に関しては、江戸の末期であるので、おそらく时期的に夏の報恩講は行われなくなつていたと思われ、その講讀や講演の期間は、三月から九月までで、夏の報恩講には重なつては重なつては重なつていない。しかも、X本では、「書写」と記されているのではなく、「講讀」や「講演」などと記されているので、おそらくは『十卷章』の講義を行つたか、あるいはその講義に列席していたものと考えられる。あるいは、夏の報恩講に代わつて、『十卷章』の講讀や講演が行われるようになっていたと考えることができるかもしれない。そうになると、なおさら『二教論』に引用されている『釈論』を通して、『釈論』への頭密の解釈の違いを理解する必要があつたものと思われ、「三師点」や頭注の意味合いが増しているように思える。

参考文献

『十卷章』

X本 『即身成仏義』(智山書庫二二棚・四〇箱・九番)

『声字実相義』(智山書庫二二棚・四一箱・三二番)

『卍字義』(智山書庫二二棚・四二箱・二番)

『弁頭密二教論』卷上下(智山書庫二二棚・四四箱・一番)

『秘藏宝鑰』卷上中下(智山書庫二二棚・四五箱・一〇番)

『般若心経秘鍵』(智山書庫二二棚・四八箱・一〇番)

『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(智山書庫二二棚・四九箱・一八番)

Y本 『即身成仏義』(智山書庫二九棚・四七箱・三番)

『声字実相義』(智山書庫二九棚・四七箱・四番)

『卍字義』(智山書庫二九棚・四七箱・五番)

『弁頭密二教論』卷上下(智山書庫二九棚・四七箱・六番)

『秘藏宝鑰』卷上中下(智山書庫二九棚・四七箱・七番)

『般若心経秘鍵』(智山書庫二九棚・四七箱・八番)

『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(智山書庫二九棚・四七箱・九番)

Z本 『声字実相義』(智山書庫二二棚・四一箱・二八番)

『卍字義』(智山書庫二二棚・四一箱・三番)

『弁頭密二教論』卷上下(智山書庫二二棚・四四箱・三番)

『秘藏宝鑰』卷上中下(智山書庫二二棚・四一箱・三八番)

『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（智山書庫二一  
棚・四九箱・二〇番）

国立国会図書館デジタルコレクション（URL：<https://idndl.jp/bib/000007295575>）

頼瑜『釈論愚草』（大正大学図書館蔵）

聖憲『釈論第三重』（寛永十年刊）

村山正栄『智積院史』（弘法大師遠忌事務局、昭和九年）

## 註

(1) 『即身義』では「万治三年二月中瀬 高野山宝光院第廿四世末葉 応盛〈謹書〉」（十九丁左）と刊語があるが、『秘鍵』では「享保十七年壬子歳十一月吉辰再治 皇都書肆」という刊行の語があるので、享保十七年の再版であろう。

(2) 『二教論』上「寛政九〈丁巳〉 曆三月廿四日以尾州泰音法印御本此卷夏講之暇於洛東五百仏山写了〈杜多〉 堅康〈二十丸〉」（二十五丁左）

(3) 『二教論』上「弘化四〈丁未〉 年五月朔日至同廿四日合十四席疏卷講讚畢 智山養真院義観 于時嘉永元〈申〉 年從三月十八日至四月三日十三席疏卷講筵畢 仏子義観弘現 安政六〈巳未〉 年從五月六日至同十九日合十二席講演竟 佐州毘盧山主弘現 明治九年〈丙子〉 從五月三十日至六月十六日合十三席講演畢 伊佐弘現記」（二十五丁左）

(4) Z本には『即身義』と『秘鍵』がないので、同じ刊本かはわからないが、おそらくはX本と同じ版であると思われる。

(5) 『即身義』の奥書に「永仁二年九月二日於中性院一部十巻私

意楽任点畢是偏為初心末学歟後賢判定之 南山隱老権律師

頼瑜〈春秋六十九〉」（十九丁左）と頼瑜の加点を記し、『菩提心論』では、この記述と共に「慶安元年五月念日旧点校

合以墨加之（今以朱点之（朱書） 安楽寿院沙門運敵」（十

六丁右）と運敵の校合と加点を記している。

(6) 「寛政九年〈丁巳〉 四月二十二日僧正等空御真本御弟子泰音法印之御本（ヲ以）書写畢」（十六丁右）

(7) この左の書き込みは、版本にあるように見え、X本では朱でそれをなぞっているように見える、同じ万治三年の刊語をもつ国会図書館デジタルコレクション所載の『二教論』の版本にはこの点がなく、後の墨書での加筆の可能性もあるが、国会図書館の『秘鍵』には享保十七年の記載がないので、おそらくは別の版で再治刊行の際に加えられたものである。

(8) 『釈論二愚草』上之二（八十九丁右〜九十丁右）

〈キーワード〉

『弁顕密二教論』 『釈摩訶衍論贊玄疏』 『釈摩訶衍論通玄鈔』 『釈摩訶衍論記』 論義